

特集について

小川賢治

メディア社会学科は、メディア分野と社会学分野の2つの分野から成っている。その両方の分野を学ぶことによって初めて、メディアについても現代社会に関しても、より深い認識が得られるという考え方に立って作られた学科である。メディア分野には、単純に区分するならば、新聞、放送、広告広報、アニメ、ニューメディアと、主要なメディア分野を網羅した教員が揃っている。社会学分野には、政治社会学、ジェンダー論、コミュニケーション論、理論社会学、を主な研究対象としている教員がいる。

今号のメディア社会学科特集では、学科所属の各教員が、それぞれの専門分野や担当授業に関して論文や報告をまとめた。以下、各論文の内容を簡単に紹介する。

福永勝也の「中東における「民衆革命」の連鎖と長期独裁政権の崩壊ドミノに対する考察」は、いま、中東諸国において連鎖反動的に起きている「民衆革命」について論じている。リビアなど中東諸国の政権はどれも盤石の長期独裁政権だったが、「フェイスブック」に代表されるインターネット・パワーによって突き崩された。このことに見られるように、高度情報化時代に登場した新たなメディアが政治革命を実現する過程を事実 に即して検証している。

君塚洋一の「現代広告と「市場情報システム」——変容する情報提供主体への視座(序論)」は、情報提供主体変容の研究の序論として、流通・小売業者から製造業者へとシフトした現代広告成立期の市場情報の送り手の変遷をレビューしている。現代広告の市場情報の質は送り手と提供コスト負担主体に左右され、送り手となる主体は、取引当事者間の力関係やメ

ィア環境の変化により変容を遂げる、という特徴があるが、それが、インターネット普及期の現在、大きく変容している、という認識にもとづいて論じている。

関口久雄の「iPodの針(の論理)」は、78年前の中井正一の京都日出新聞への投稿「蓄音器の針」を通して現代のメディアと社会を考えている。中井は、戦前・戦中・戦後を通じて、マルチな分野で、思考し、実践し、各時代のコミュニケーションの特色を独自に整理して、それらを統合する「委員会の論理」を提唱した。

近藤晴夫の「放送を活用した住民と学生による地域再発見」は、地域住民と学生がタッグを組んで亀岡・丹波地域の問題を取材し、地域メディアを通して大学から発信していこうというプロジェクトの1年間の取り組みを報告している。2010年に市民と学生による手作り番組として「DO! タンバRadio」がスタートしたが、そこで制作した16作品と、KBS京都ラジオで放送した7作品を踏まえての報告である。

有吉末充「アニメ制作ワークショップの実践と考察」は、ここ数年かけて横浜と京都で児童、大人向けに実践してきたアニメ制作を体験するワークショップの中から、2009年に横浜で行った児童向けワークショップの事例を報告し、アニメリテラシー教育としての効果と今後の課題について考察している。

小川賢治「社会学概念による京都論」は、社会学に特有の概念を用いて京都について分析を施し、今までの幾多の京都論とは異なる新しい知見を得ることを試みた論稿である。

黒木雅子「私の「社会学調査演習 sf」」は、担当する「社会学調査演習」での成果として、過去7年間の調査報告書から学生たちの学びを紹介している。この1年間のゼミは、対面による聞き取り調査を中心に、社会調査の基礎を学び、「自前のデータ」で「問い」に答えるという演習であった。